

芸能の絵画資料の収集

——狂言を絵画から読む——

藤 岡 道 子

1

芸能は時代を凝縮する。時代の真相、人の心の真実は芸能によって如実に知見することができる。しかしながら芸能にはひとくせふたくせあって、その読み解きには特別の才知と熟練の技能を必要とする。音楽の解説、文芸の解説においてそうであるように。

狂言が中世の時代相を率直に表していることはその第一の特色としていわれてきたことである。しかし実は中世の狂言の記録はごく少なく、近世にいたって書きとめられた文献によって遡及して想像をたくましくするしかその姿を知る手立てがない。さらに近世の狂言にしても台本と上演記録は中世に比して圧倒的に多くはなるが、鑑賞者からの記録すなわち批評などは同時代の能や歌舞伎に比べまことに少ない。近世の狂言の姿も意外に視覚的には見えていない現状なのである。狂言が今日、古典芸能として高い評価を得、国語の教材としても活用され、他の演劇や文芸にも少なからぬ影響を与えていることを思えば、この過去のくらがり是多方向からの照明で明らかにしていかねばならないものと思う。狂言が自分の過去を知らない根無し草として次代に漂っていかないように、近代の風で変容しつつも中世近世の水脈は正しく受け継いでいくように。

2

狂言の絵画資料の研究は近年までほとんど手付かずの領域であった。絵画資

料の研究への導入は歴史や文学においてはかなり早くからなされていたが、たとえば歴史において学校教材の挿絵としての「頼朝像」、文学において平安文学作品の挿絵としての「源氏物語絵巻」などはほんの一例である—もっとも必要なはずであった能や狂言にはその導入が遅れていた。既にかんがりの成果を上げている歴史や文学の方法から狂言の研究も多くを学ばねばならないところにきている。

先の「頼朝像」の例に戻れば、長い間歴史教科書に載って日本人大半のイメージの中に頼朝として定着してきたこの「頼朝像」は、近年の研究から実は頼朝の像ではなかったとの新説が出され、いまや頼朝の相貌は謎となってしまった。しかしながら別人をそれと思い込むよりははるかに正しいありように現在はあるということである。あらたな頼朝像の発掘と確定は歴史研究者の明日にかかっている。また「源氏物語絵巻」はその画面の精緻な復元作業によって登場人物の心のひだに分け入る新たな読みが提唱され、文学作品研究に異質にして芳醇な一ページを加えている。歴史や文学において絵引き、絵解きの方法から姿を立ち現した新事実はもはや数知れない。琵琶法師の語った「平家物語」。琵琶法師は盲目にして流浪する芸人であったが、盲目でどのように諸国を歩いたのか、「平家物語」研究史においては問題にもされてこなかった。絵引き、絵解きの資料たる絵巻や風俗図屏風絵などによって、盲目の琵琶法師は通常ひとりないしふたりの晴眼の少年を伴っていることが明らかにされ、それが琵琶法師の旅の実相であったと考察されたのである。このことは旅姿の解明だけでなく、「語り」の継承がどのようになされていったかの、あまり文献資料からは見えてこない領域をも明らかにしていくことになるだろう。

この十数年、狂言の絵画資料の収集に取り組んできたことで先に述べた研究史のくらがりによくぶんかの照明を当てることができたかもしれない。しかし狂言絵画資料の全貌を知ることは不可能事で、それでは何をもって、どの程度をもって狂言絵画資料の一定の成果とすべきか、ということになる。まずは時代別に基準作というべき好資料をできるだけ多く集め、分類し、その内容の考察をすることができたか、であろう。狂言の歴史は通常、中世、近世、近現代

に三分されるからその時代によって収集、分類、考察をしていくわけだが、まず中世の狂言は狂言そのものの絵画資料が少なく、狂言が描かれているとは思われない絵画資料から狂言の記録を抽出ていかなければならない。一例を上げれば洛中洛外図の画中の景物、四条河原の勧進能上演などを見出して上演曲目を特定、考察していくという方法がある。これはすでに、昭和60年代には一般化しているもので、この類の資料の公刊と解説によって中世末の上演状況はかなり視覚化されたといつてよい。ただ資料が狂言上演の正確な記録のためのものではないので、解説には多大の注意を要する。資料の制作年も作者も制作目的も不明の絵画の中で、たとえば舞台上に三人の登場人物が描かれていてもそれが当時の狂言の実態であったと言ってしまうことは危険なのである。この時代の風俗図、寺社参詣図、寺社縁起絵等は近年発掘が続き公刊もされるようになってきているので、継続した良好な研究成果は期待できる。狂言絵画研究としてはたえず歴史や美術史からの余滴を舐めているような現状ではあるが。

近現代の狂言絵画資料はこれもまた多くはない。狂言は絵画に移行するような美的情景を多く持たず、美術作品として描きたいという意欲をかきたてるのではないらしい。そもそも上演舞台の絵画は絵画史の中での重要分野ではない。ドガの踊り子を例にとってもパリの劇場のある日ある時の上演記録ではなく画家の強度のメッセージが込められた人生論の趣がある。人生論の趣を強く持たなくては絵画として第一級にはならず、絵画として第一級になれば上演記録としては第一級でなくなるのである。写真の発達で絵画の記録、資料としての意味はうすくなったのがこの時代であるといえる。一種の狂言批評として絵画を読むような活用によってこの時代の狂言絵画資料は意味をもつことがあるだろう。

近世の狂言絵画資料の収集がそこで当面の課題となるのである。狂言そのものの舞台図が出現し、継承されていく近世。歌舞伎とその盟友浮世絵のような波乱にみちた関係は狂言と狂言絵には期待できそうもないが、見えなかった狂言の姿が見えるようになっていく。歌舞伎—浮世絵を解説するのとは別種の喜びがある。本稿ではこれまでの成果を整理し、さらに新出の、また研究の俎上

になかった資料を紹介、考察していくことにしたい。本稿によってすべての作業が完結するわけではなく、狂言絵画資料の悉皆調査のひとつの踏み台にして階段の第一段であることはいうまでもない。

3

本章では狂言絵画資料に関する先行研究および拙稿についてまとめる。

狂言の絵画資料についての先行研究で管見に入ったものは本章中ごろで取り上げる拙稿(8)「描かれた狂言—近世狂言絵画の諸例を見わたす—」にまとめたのでそれを以下に再述する。本章では既公刊の拙稿を話題にするので、それらの稿には書かなかった狂言の曲名を一々上げ、後の検索の便宜を図りたいと思う。拙稿(8)で取り上げたのは次の四つの著作、論文である。

- (1) 『図説日本の古典 能狂言』所収「能狂言絵」木村重圭(1988 昭和62)
- (2) 『芸能史研究』一三一所収「若衆のいる狂言舞台図—(大小)の舞台図など」永井猛(1995 平成7)
- (3) 早稲田大『演劇研究』20所収「演博蔵『狂言古図貼交屏風』の素性と価値」林和利(1996 平成8)
- (4) 『能・狂言研究』所収「幕末鷲流狂言事情—一枚の狂言画から—」田口和夫(1997 平成9)

さきに中世の狂言絵画資料の研究は昭和60年代からと描いたのはこの(1)の論文がその嚆矢にあたるとの判断からである。この判断はこれまで管見に入らなかった論文の発掘で訂正することもありえるが現在では一応こう考えておく。各論文の内容の要約は割愛し、それぞれにおさめられた狂言曲名を五十音順に書上げ(曲名前の□は五十音の行を表す)、簡略な藤岡の考察を加えたい。

- (1) □か・「首引」『能狂言絵巻』東京国立博物館蔵

□は・「舟渡婿」(『四条河原図巻』個人蔵カ)

その他『図説日本の古典 能狂言』には次の図も収録されている。

□あ・「うつば猿」月岡耕漁筆 法政大学能楽研究所蔵

□か・「狐」図(狂言「釣狐」翻案)葛飾北斎筆 所蔵者明記なし

は・能「百万」の間狂言 絵入り謡本『百万』個人蔵カ
国立能楽堂所蔵の別に取り上げるので略す。

- (2) あ・「うつば猿」 さ・「三人型輪」 た・「大小」 は・「武悪」・
「梟（梟山伏）」 や・「湯立」・「米一」 わ・「若菜」

以上8点 若衆狂言の図かとも考察されている。論文発表当時美術商羽黒洞蔵

- (3) あ・「朝比奈」 か・「雁大名」・「狐塚」 さ・「地藏舞」カ・「しびり」
（論文の中で曲名不明とある。藤岡の比定）・「宗論」・「酔はじかみ」・「煎物」
た・「つと山伏」は・「包丁婿」

以上10点 現状は屏風装であるが、各図みな団扇形であるところから、国立能楽堂蔵の「狂言古図」の離れと考えられる。拙稿（8）参照。

- (4) さ・「鱸包丁」鷲権之丞正名筆カ 嘉永6（1853） 野村万蔵氏蔵

以上1点は拙稿（8）所収「観世座能狂言写生帖」の離れまたは下書きかと考えられる。

次に狂言絵画資料に関する拙稿をまとめておく。狂言絵筆者の生年が江戸時代である場合は絵の制作年が近代であってもその資料も掲載した。番号は後の検索の便宜のため先行研究番号からの続きとした。

- (5) 「万治三年刊「ゑ入狂言記」挿絵の諸問題」聖母女学院短大研究紀要
27（1998 平成10）
- (6) 「伊勢門水の狂言画」聖母女学院短大研究紀要28（1999 平成11）
- (7) 「土佐光孚の狂言絵」聖母女学院短大研究紀要29（2000 平成12）
- (8) 「描かれた狂言—近世狂言絵画の諸例を見わたす—」聖母女学院短大
研究紀要30（2001 平成13）
- (9) 「玉手梅洲の能狂言絵—福尾家蔵扇面能狂言絵三十面—」聖母女学院
短大研究紀要31（2002 平成14）
- (10) 「英一蝶の描いた狂言」聖母女学院短大研究紀要32（2003 平成15）

(128)

- (11) 「鴻山文庫蔵『狂言図巻』と『能狂言画鑑』」 聖母女学院短大研究紀要 33 (2004 平成16)
- (12) 「新出『狂言画集』の紹介と考察」 聖母女学院短大研究紀要34 (2005 平成17)
- (13) 「狂言絵馬を読む」 聖母女学院短大研究紀要35 (2006 平成18)
- (14) 「玉手菊洲の能狂言絵」 聖母女学院短大研究紀要36 (2007 平成19)
- (15) 「玉手菊洲の能狂言絵続考」 聖母女学院短大研究紀要37 (2008 平成20)

以上の中には能の絵も描かれているものもあるが、狂言のみを取り出し、曲名をあげていきたい。

(5) この稿でとりあげたのは版本「狂言記」挿絵で、刊行された「狂言記」の挿絵をたとえば岩波書店「新古典文学大系」ですべてみることでできるので曲名を略す。

(6) あ・「犬山伏」・「うつぼ猿」 か・「茸」 た・「大黒連歌」 な・「寝音曲」 は・「萩大名」 ま・「被箕」 や・「米市」

伊勢門水絵との比較のため玉手菊洲、河鍋暁斎の絵も収載。

(7) さ・「末広がり」 た・「釣狐」 な・「業平餅」 は・「花子」・「鼻取相撲」・「福の神」

以上はすべて生駒市宝山寺獅子閣の襖絵。土佐光孚は安永9 (1780) 生、嘉永5 (1852) 没。宮中絵所預で当時の京都画壇の大御所。

(8) あ・「うつぼ猿」・「瓜盗人」 か・「栗焼」 さ・「地蔵舞」 た・「大小」・「釣狐」 な・「名取川」・「抜殻」 は・「棒縛」・「法師ケ母」・「舟渡婿」 み・「水掛婿」・「水汲」(・曲名特定の出来ない曲1曲)

以上が本稿で絵が見られる狂言の曲名であるが、絵は掲載できなかったものの多くの近世資料の所収狂言全曲名を記してあるので資料の所在の検索には便利な稿である。

(9) あ・「うつぼ猿」・「鬼瓦」 た・「宝の瘤取」・「狸腹鼓」・「釣狐」・「鈍太郎」 は・「花折」・「花子」・「福の神」・「仏師」・「文荷」

や・「米市」

以上12曲のほかは能の絵。玉手梅洲は幕末から明治にかけて活動した大阪の町絵師。

- (10) あ・「悪坊」・「朝比奈」・「粟田口」・「犬山伏」・「内沙汰（右近左近）」・「うつば猿」・「瓜盗人」・「夷毘沙門」 か・「柿山伏」・「首引」 さ・「止動方角」・「宗論」・「末広がり」・「墨塗」・「節分」・「煎物」 た・「通円」・「釣狐」 は・「花子」・「比丘貞」・「髭櫓」・「福の神」 ま・「枕物狂」 や・「八尾」・「米市」（・曲名は特定できないが嘘吹面の男）

以上25曲。筆者の英一蝶は元禄期の高名な絵師。

- (11) あ・「麻生」・「居杭」・「犬山伏」・「今参」・「伊文字」・「うつば猿」・「夷毘沙門」・「鬼継子」・「伯母ヶ酒」 か・「金津」・「雷」・能「加茂」間カ・「木六駄」とあるが不詳・「籤罪人」・能「国栖」間カ・「口真似」・「腰祈」・「子盗人」 さ・「三人型輪」・「二千石」・「止動方角」・「末広がり」・「酢はじかみ」・「墨塗」・「煎物」 た・「千切木」・「釣狐」 な・「抜殻」 は・「萩大名」・「花子」・「鼻取相撲」・「武悪」・「文相撲」・「舟渡婿」・「文荷」・「文山立」・「法師ヶ母」 ま・「水掛婿」 や・「八幡前」・「祐善」・「米市」・（その他、曲名を特定できない曲が3曲）

以上44曲が拙稿収載。『能狂言画鑑』は既に売却されて現所蔵者の名は明らかでない。売り立ての時点で古書肆で書き写した全曲名を記載したので参照されたい。

- (12) あ・「朝比奈」・「歌争」・「夷毘沙門」・「鬼瓦」 か・「雁つぶて」・「口真似」 さ・「薩摩守」・「素襖落」 た・「樽婿」・「千鳥」・「茶壺」・「鈍太郎」 な・「長光」・「成上り」・「鶏婿」 は・「萩大名」・「比丘貞」・「人馬」・「法師ヶ母」・「盆山」 ま・「松ゆずり葉」・「水掛婿」 や・「八幡前」・「祐善」

以上24曲。曲名の特定は旧蔵者江島伊兵衛氏と考えられる。

(130)

(13) た・「釣狐」 は・「福の神」

(14) 本稿は能絵のみ。菊洲の狂言絵についての言及はあるが絵の記載なし。

(15) か・能「国栖」間 た・「唐船」後の間

以上狂言は2曲のみ。他は能絵。(制作年は大正2年であるが前述したように筆者の生年が江戸時代なので作品をここに入れておく。)

以上、拙稿に掲載した狂言絵について五十音順に整理した。たとえば近世の「萩大名」について考えるときにははの項を検索し所収本を探することができる。狂言を記載した本それぞれの成立年、筆者、資料的な確実性等については各稿において考察した。(以上の絵に三番叟は含まなかったことを断っておく。)

4

前章においては先行研究書中および拙稿中に収録してあって見ることの出来る狂言絵について列挙していった。悉皆調査の第一段とはいえ、いかにも手当たり次第の感がある。しかしながらこの暗中模索から資料の埋蔵箇所が探し出せていったわけで、少しずつ今後の探査の方法と方向が見えてきている。資料はどこにあるのか。まず個人のコレクションである。次に公私の博物館、美術館である。そして特定機関(公私の大学、劇場等)のコレクションである。これらを見るための手立ては公刊された図録によるのがまず第一の方法。次に未公開のものを現地で閲覧、あるいは撮影させてもらうのが第二の方法である。この両方法を使って資料収集を今後も進めていくわけであるが、第一の方法はある程度「悉皆」に近づけることができる。本章では手始めに国立能楽堂のコレクションを見ていくことにしたいと思う。

国立能楽堂は昭和58年に創設された能狂言のための劇場で、公演業務のほか、能狂言役者の育成、能狂言の貴重資料の収集も行っている。資料の閲覧は手続きを経ればほとんどすべての収蔵品の閲覧が可能である。定期的に新収蔵資料の公開も行い、収蔵資料の目録も公開されている。これまでに公刊された

目録には次のものがある。

- ① 「収蔵資料展」パンフ（収蔵資料一覧）〈1993 平成5〉国立能楽堂開場10周年記念
- ② 「収蔵資料展」パンフ（収蔵資料一覧）〈1999 平成10〉国立能楽堂開場15周年記念
- ③ 「収蔵資料展」パンフ（文献・絵画一覧）〈2004 平成15〉国立能楽堂開場20周年記念

このほか「国立能楽堂収蔵資料図録」Ⅰ、Ⅱがあり収蔵資料のうち面や装束類を除く文献、絵画の優品の写真が収められている。Ⅱは2003年〈平成14〉刊。凡例によれば「国立能楽堂が昭和58年9月の開場から平成13年までに収集した資料の内、「文献・絵画」として分類するもの（89点）の中から選定した19点の図版目録である」とある。Ⅰ、Ⅱの2冊によって国立能楽堂蔵の近世の狂言絵画の資料はほぼ全部が見ることができ、巻末には五十音順の曲名一覧が有るので検索にも便利である。ⅡにはⅠ、Ⅱにおさめされた資料のすべての画像データCD-ROMがついている。この図録刊行以降の収集品は2008年2月に入手した資料リストおよび前述③「収蔵資料展」図録〈2004 平成15〉によれば13点あるがその中に近世の狂言絵画の載る資料は次の2点3図である。

「能楽手鑑」（伝備州池田家伝来）所収の^あ・能「安宅」間 ^か・能「国栖」間

「暁斎漫画2 狂言」（河鍋暁斎筆）所収の^さ・「墨塗」（制作年は近代だが暁斎の生年が江戸時代なのでここに入れる）

また既収蔵品の離れの新収集がありそれは次の1点1図である。

「江戸初期古能狂言之図」の離れの^は・「花子」

この都合4図をⅠ、Ⅱの巻末の曲名一覧に加えれば現時点での国立能楽堂所蔵狂言絵画資料の総覧となる。

現時点において狂言絵画資料の収集が期待される公的機関としては国立能楽堂が拠点であるといってよい。国立博物館・美術館に国立能楽堂のような収集の期待がもてないのは、狂言絵画資料が美術品としての高い価値を持たないも

のが多いからである。狂言の研究にとっては貴重な資料であっても、国立博物館・美術館に収集される作品は歴史的美術的に高い価値のものばかりなので、選別されてしまうのだろう。東京国立博物館蔵の「能狂言絵巻」(伝柳営御物)のような御物あるいは大名道具の類を国立博物館・美術館は大いに集め公開をしてほしいものと思う。

5

国立能楽堂の公開資料について見ていった次には同じような機関の探索が順であろうが、国立博物館・美術館では芸能の絵画資料の目録・図録を出しているところはない。4章で述べたような理由で資料収集がされていないのであろう。私立美術館では大名家の能狂言資料が纏まって収集されているところがあるので、本章ではそのいくつかを見、現在入手し得る狂言絵画資料の情報を集めてみたい。

名古屋の徳川美術館は尾張徳川家の伝来品を伝え、国宝9件、重要文化財・重要美術品多数を蔵する日本有数の美術館である。名古屋市東区徳川町にある同館ではテーマ別に収藏品図録を公刊していて能、狂言に関するものには「徳川美術館収藏品抄9能面・能装束」がある。ここに収録されている309点の中で狂言絵画に関わる資料は次の2点である。

「山脇流狂言図」3帖

「三番叟 蒔絵鼓箱」

「山脇流狂言図」については当時徳川美術館学芸員であった山川暁氏の東海能楽研究会での口頭発表でその存在を知り(図録には既に収載されていたのだが)、前掲の拙稿(8)にその全曲名を挙げ、許諾を得て数点の画面の写真を載せている。「山脇流狂言図」の全図は未公開で、本図録に載るのは次の通りである。

「山脇流狂言図」所収 さ・「三番叟」・「煎物」 た・「唐相撲」(部分)

な・「禰宜山伏」 は・「花折」・「髭槽」

「三番叟 蒔絵鼓箱」側面図 さ・「三番叟」

以上2点6図である。ここで本稿では省略してきた「三番叟」を取り上げたのは

この両図にある共通の描きかたに注目がされるからである。一方は画帖、一方は黒漆金蒔絵の鼓を収める箱であってまったくその絵の筆者は違うと考えられるにもかかわらず、三番叟の足先を包むほど長い袴が共通している。千歳の袴は鋭角的に半袴に描かれているので、「三番叟」が半袴でなく長袴で舞っているように描かれているのは確かである。「山脇流狂言図」の筆者、伝来についての記述は同図録にはなく、鼓箱の方は、おさめられた鼓（銘 客来）が尾張徳川家初代義直ゆかりとのことなのでこの箱もまたそうだと考えられるが、この二図の影響関係については定かでない。実は「三番叟」が長袴で舞うように見える図は徳川家以外の資料にもあって、「三番叟」図に踏襲されたパターンがあったのかもしれない、あるいは江戸初期の作らしいこの箱の「三番叟」図がパターンの極初期に位置するといつてよいのかもしれない。この箱に描かれた囃子方も「山脇流狂言図」の囃子方によく似ており、特に笛方はほとんど重なっている。両資料は同じ祖本を見ていると考えられよう。

さて徳川美術館の図録に載る狂言図はこの6図で、「山脇流狂言図」と「三番叟蒔絵鼓箱」のみが同館所蔵の狂言の絵画資料のすべてかどうかは今探索するすべはない。国宝の絵巻や刀剣など館蔵になる世界的な美術品に比べ公開の意義が一段低いと考えられているであろう資料はなかなか一般の目には届かない。狂言絵画資料探索の困難がここにある。

次に林原美術館の狂言絵画資料について見ていきたい。岡山市丸の内にある林原美術館には実業家林原一郎氏の東洋美術コレクションと岡山藩主池田家伝来の宝物、国宝2件、重要文化財・重要美術品多数が所蔵されている。池田家伝来品の中に能狂言絵画資料がある。池田家は初代光政、続く二代綱政以降代々能楽を好み多くの能楽関連の美術的価値の高い品々を蓄積していた。絵画資料では藩主自筆の能絵があり、管見によれば藩主自筆の能絵はあまり他藩には例のないことのようなのである。館の学芸員によると能狂言絵画資料はまだ未整理の状態にあるとのことで、時々特別展において公開されるのを待つしか目にはできない現状である。能絵は「林原美術館名品展 華麗なる能装束」

(郡山市立美術館)に「備州池田家伝来 能楽手鑑」所収の6図が掲載されている。これは国立能楽堂の新収蔵資料のところで前述した資料で、平成17年の展示のため国立能楽堂から郡山市立美術館に貸し出されたものである。本図録の掲載図に狂言の絵はない。「林原美術館の名宝」(MOA美術館)には「能仕舞図」(池田綱政筆)、「能の図押絵手鑑」(法林院綱政女細工 詞池田継政筆)、「諷形図」(池田継政筆)の3点が収載されているがこの中に狂言が描かれているのは次の1点1図である。

「能の図押絵手鑑」所収の^さ・能「石橋」間

「能の図押絵手鑑」は裂地を用いて登場人物の衣装や作り物などをそれらしく押絵に仕上げた珍しい作品で、大名家の女性の能楽愛好の様子がかうかがえてほほえましい作品である。「能仕舞図」「諷形図」はそれぞれ20番34場面、100番を収めると図録解説にあり、全図の公開公刊が待たれるところである。狂言絵画資料も未整理のままあるとのことでこれも早い公開を期待したい。

以上、二つの近世大名家の能楽関係資料の中の狂言絵画資料を公刊された図録によって見ていった。この2例から知られるように大名家の伝来品は公的機関に入らない限り個人蔵の枠内であって閲覧もたやすくはできない状態におかれている。狂言絵画資料の探索の困難はそこにあるが、1点1図なりとも公開されたのを機にさらに探索の手を広げていきたいと思う。

6

本稿は狂言絵画資料悉皆調査の始めの一步である。これまでの10年余の成果をまとめ、さらなる資料を紹介、整理した。今後の研究の方法と方向についての見通しもおのずから示し得たと思う。前述の通りこの作業が終着点にいたりつくことはありえないが、こうして収集した絵画資料を曲名の50音順に整理しその出典を記した一覧をつくることをここ数年の目標にしたいと考えている。さらにその過程において狂言絵画から読み解かれる狂言の演出について考察していきたい。

Collection and Research of Kyogen Illustrations

Michiko Fujioka

Kyogen Illustrations, though useful for visual image of classical stage of Kyogen, Japanese medieval comedy, have not been studied or even taken up as a subject for studying. Kyogen Illustrations have not been so famous as Kabuki Illustrations, Ukiyoe, we who are interested in classical Kyogen, should begin by finding them. They generally had been Daimyo's possession, it is not easy to get or to peruse them even still now. Some of them had been offered for sale, and we could peruse them at a museum or a public collection. To find out where they are, first of all, is our subject. After finding many of them, researching of Kyogen classical stage might be able to start. This is a treatise on collecting of Kyogen Illustrations, pigeonholing data, and researching of them.